

第1部  
事業所 × 困 惑

私たちは  
支える

知らなかったことかもしれませぬ。

目を背けていたことかもしれませぬ。

でもこれからの共に生きる社会では、

とても大切なことです。

障害者差別解消法が今年4月に施行されました。

障がいのある人のことや事業所のこと、ご存じですか。



市内の主な障がい者福祉サービス事業所の理事長たちが、特集の趣旨に賛同して集まってくれました。左から順に、宮脇一彦起生会理事長、東智子玄洋会管理部課長、坂田利家恵愛会理事長、小峯壽々子サンテラス福祉会理事長、津留英智水光福祉会理事長 ●撮影日 11月17日

# パンの宣伝になるよとお母さん 笑顔で応える将生さん



福岡サンテラスに通う小峯将生さん。福岡サンテラス立ち上げの頃の一時、市外の授産施設で生活していました。「当時は法律で守ってもらえなかった時代。虐待もあったと思う」とお母さん ●取材日 11月9日

「ここにいたら怖い思いをする?」。利用者からの言葉に、福岡サンテラスを運営する小峯壽々子さんは絶句したそうです。約4か月前のあの事件は、障がいのある人やその家族を恐怖に陥れたといえます。「抵抗できない人たちへの蛮行は、どんな理由があっても許せません」と語る壽々子さんは、障がいのある息子がいます。

息子の名前は将生さん。壽々子さんが22歳のときに産んだ子どもで、生まれつきの脳性小児まひ。昭和37年のことです。まだ治療法もなく、病院からは「長生きはできない。大事に育てなさい」と言われたそうです。

## 萎縮することなく 地域と歩みたい

将生さんが小学生になる年齢になったある日、家に就学免除の紙が届きました。学校に通わなくていいという内容でした。「嫌だ。同じように学ばせたい」と、近くの小学校に相談に行きますが断られます。次に新宮町の養護学校、今でいう特別支援学校に相談しますが、「重度の障がいがあり、話もできない。保育所などにも通っていないから、集団生活ができるわけがない」と、そこでも断られます。

「いと、そこでも断られます。ほかの学校も探しますが、ありません。しかし、壽々子さんは幼稚園を見つけてます。1年間幼稚園に通い、集団生活に慣れさせ、翌年再び養護学校に申し込みました。残念ながら不合格。また1年間幼稚園に通いました。今度こそと三度、養護学校に申し込みます。」どうしたら通うことができるのか」と職員に食い下がりました。条件がでます。「親が常に付き添うこと」。



小峯壽々子理事長

壽々子さんと将生さんの養護学校生活の始まりです。将生さんを膝に抱き、教室で授業を受けます。一日中、暑い日も寒い日も毎日です。それでも学校に通えることは喜びでした。将生さんが中学3年生になるまで、その生活は続きました。昭和54年、養護学校も義務教育化されます。教室に補助員が付き、壽々子さんは授業から解放されます。その1年後には将生さんが高等部に入り、車椅子

を使います。「肉体的にも精神的にも解放され、この頃から将生の卒業後を考えるようになりました」と壽々子さん。昭和57年、福岡サンテラスが産声を上げました。「養護学校を卒業した後、どこにも行くところがない」。障がいの抱えた親たちが、同じような悩みを話し合う場として集まったのが始まりでした。無認可の障がい者共同作業所は、障がいのある人たちの日中活動の場です。



▲福岡サンテラスで障がいのある人たちを支える職員の皆さん

# パン生地を大事に扱う奈衣さん たっぷりの愛情が入っています



アトリエ夢工房に通う井浦奈衣さん。親の仕事の都合で東京、兵庫、長崎と転勤が続いたそうです。お母さんは「小さいときは、いろいろとありましたが、元気に育ってくれました」と語ってくれました ●取材日 10月31日

一つ一つのパン生地を、慣れた手つきで丁寧に上手に丸める井浦奈衣さん。動作はゆっくりとしていますが、とてもきれいに成形していきます。

奈衣さんにはダウン症があります。ダウン症とは先天性の遺伝子疾患で、染色体の分裂異常で起こる状態の総称です。合併症の有無や筋緊張の程度などにより症状はさまざまです。「出産後、急に看護師さんがバタバタとしました。これは何かあると思っていたら、ダウン症でした」と語るお母さん。「筋力があまりないので、泣く力も弱かったし、母乳も上手に飲めませんでした。成長しただしてからも、言葉覚えるのが遅かったし、歩きだすのも遅かった。でも、その分たぐさん抱っこすることができました」と笑顔で振り返ります。そんな奈衣さんに合併症が起きます。病名は急性リンパ性白血病。血液ががんに冒される病気です。5歳のときでした。

それから奈衣さんは入院を繰り返します。完治するまでに5年以上かかりました。小学校は病院の院内学級に入学し、

完治後は養護学校に入りました。それからは特に大きな病気をすることもなく、中学部、高等部と養護学校に通いました。学校を卒業してからは、ここアトリエ夢工房に通います。アトリエ夢工房は、今から6年前の平成22年にオープンしました。パンやコーヒーの飲食ができるカフェを併設したパン屋です。パンを作ることで、奈衣さんは工賃を受け取っています。ここは就労継続支援B型と、

呼ばれる事業所です。B型は、雇用契約を結ぶことが困難な人が、工賃をもらいながら授産的な活動を行う事業所です。工賃はわずかな額ですが、それでも生活が楽になり、やりがいも生まれています。

奈衣さんが働く工房は客から見える形であり、店は開放的な雰囲気です。

「障がいのある人が作る品で店を構えて、地域との関わりを日常的に持つことができれば、

そして喜んでもらえたらすてきだと思ひ。パン工房にしました」と語るのは理事長の宮脇一彦さん。それでも当初は不安があったそうです。「障がいのある人が作っている姿をお客様に見せるといふ、当時としては珍しいスタイルです。この開放的なスタイルを地域が受け入れてくれるのだろうか」と。しかし取り越し苦労でした。徐々に固定客も増え、支援の輪も広がっています。あるそうです。「でも」と続けます。



宮脇一彦理事長

「やまゆり園の事件には困りました。いつでも地域の人が入れるように、声をかけてもらえるようにとオープンな事業所にしていましたが、行政指導もあり防犯対策の強化を図らざるをえません。残念です」。

最後に「私たちはがんばっている人たちの社会参加、人権を、とにかく大切にしたい」と語る宮脇さん。その考えを表してか、アトリエ夢工房では明るい笑い声が響いていました。

## 作り手が見える形で 地域に溶け込みたい



▲アトリエ夢工房で障がいのある人たちを支援する職員の皆さん

# いちばん好き なぬいぐるみを 見せてくれた滋彦さん



昭和学園に入所している満生滋彦さん。部屋にはぬいぐるみがいくつかありました。ほかの好きなことを聞くと「海、ドライブ」と返ってきました。おそらく以前は、お父さんとドライブをしていたのでしょう ●取材日 11月8日

「これ、かわいい。かわいい」と部屋に置いてあるぬいぐるみを見せてくれる満生滋彦さん。会話をしてくれたのは、このぬいぐるみを手を持ったときだけでした。自閉症と重い知的障がいがあり、療育手帳を持つ滋彦さんは52歳。昭和学園に入所して半年が過ぎました。

滋彦さんは以前、隣の市でお父さんと二人で暮らしていました。障がいがあっても、当たり前前に普通に地域の中で暮らしていました。お父さんが今年3月に倒れ、入院します。滋彦さんは独りになってしまいました。でも、独り暮らしをする生活能力はありません。お母さんは早くに亡くなっています。昭和学園に行政からの要請が入ります。

昭和学園は緊急のショートステイで滋彦さんを受け入れられます。お父さんの体調は回復しませんが、そこで4月から入所することになりました。その矢先、お父さんは亡くなりました。滋彦さんは告別式にも出席しましたが、状況が理解できていないのかもしれない。入所してからは、夜中に奇声を上げた

## 地域のひととの交流を 季節感ある行事で

り、徘徊はいかいをしたりして、不安定な状況が続きました。6月と7月には昭和学園から抜け出し、家に帰ろうとすることもありました。薬を服用し始めた9月頃からは、徐々に奇声も減り落ち着きました。

どうれしくなります。さまざまな事情があっても、ここでの生活は独りでなく、みんなといっしょだから」と語ります。



東智子 課長

がいの程度も重いかたもあれば軽いのかたもいます。自閉症でしゃべれないかたもいます。現場で働く職員は、入所しているかたと意思疎通を図るときは表情を読み取るようにするなど苦勞しています。でも、通じ合うことができるときは喜びも大きいようです」と語るのは昭和学園の課長、東智子さん。「入所しているかたから笑顔が返ってきたり、作業をがんばっている姿を見たりすると、良かったな

季節感あふれるものがたくさんあります。社内の行事、地元よまなの小学校の運動会や文化祭、山笠やまかさ、古墳祭りとか。食にもこだわっています。お米を自分たちで作ったり、つくしを取りに行ったりして、給食で食べています」とこやかに答える東さん。やまゆり園の事件があったからというわけではないがと前置きし「障がいがあるからと特別視などせず、ありのままを見てほしい」と語っていました。



▲昭和学園で障がいのある人たちを支援する職員の皆さん